

PUREGOLD80s

いよいよゴールドラッシュの第一幕が開ける。

80年代 若い二人は人生の扉を開けようとしていた



知り合いの杉山小吉からの電話を受け、受話器を置いた。

その内容をキタハラは何度も反復した。

小吉は確かに電話の向こうで「ミュージアムを作る」と明言した。

小吉は決して早口でも小さな声でもない、穏やかだが、語尾のはっきりした語り口である。

その小吉になん度も聞き直してしまった。

えっ！ スギヤマさん、もう一回言って！

ミュージアムをどうするって？

小吉は何度聞かれても同じ言葉を繰り返す

「だから、キタハラくん ミュージアムを作ってあげるよ」

受話器の向こうで、小吉が冗談を言っているとも思えない。

「キタハラくん、よく聞いて、ボクが、キタハラくんのテイントイを主人公にしたムービーを作るよ、いいだろ、日本の最高峰のアーティストを総動員して、作るムービーだよ」

キタハラも、さすがに小吉が言う構想を理解してきた。

キタハラももちろん小吉の活躍は知っている、と言うか、知っているどころではない。

テレビをつけると小吉が演出をしたコマースシャルが頻繁に流れていたからだ。

今までの商品名だけを連呼するコマースシャルや、アイドルが登場するだけのコマースシャルとは全く別物の世界を小吉は世に送り出していたし、すでにその広告の世界では知らぬ者はいないという地位を確立していたからだ。

そのスギヤマさんがボクのおもちゃを使ったムービーを制作してくれると言っている。

「キタハラくん コマースシャルなんて短い尺じゃないよ、見応えのあるムービーさー物語をボクが書いて、アーティストの力を結集させて作る大人の寓話だよ。」

「大人の寓話？」

「そう 寓話さ、子供たちは 例えば 酒場に入っては いけないじゃない。」

子供の時間は終わり、って言ってさ、大人だけで夜中に酒を飲んだり、麻雀をしたりしてさ、子供たち、つまり自分は早く大人になってその仲間入りしたいと想像するんだよ

キタハラは電話を持って、大きく頷いた。

わかる わかるよ スギヤマさん

でもさ、大人になってその世界を覗くことができたり、参加するようになるよね、子供の頃に憧れた世界は実は色褪せているんだ。

そこで初めて気づくんだ、本当は自分たちが子供の頃にいた世界が輝いていたことをね。

だけど 逆戻りはできない。

「子供は大人に あこがれて、大きくなる」ってみんなよく言うけど、あれは嘘さ、

キタハラは受話器を落としそっになる

嘘！

思わず小吉の嘘をリフレインした

そうだよ、嘘っていう言い方が少し、どぎついなら“まやかし”とでも言うかな

一緒か、小吉は笑った。

大人になった後も、子供の頃に見た情景や感動を忘れずにいた人だけが、本当の意味で大人に感動をあたえられる人になる。

キタハラくん みたいなね。

人は大人になると感動を忘れていく生き物さ、ボクらクリエイターはそれを知っているから技法として擬似感動体験を映像で表現して、商品を買わせる。

しかし本物の感動を与えることはできない。

あくまでもテクニクで感動を演出して、流行の楽曲に乗せてブラウン管の向こうにいる消費者に届けているだけさ。

だけど、キタハラくんのおもちゃは違う。

何を間違ったか、本来消費されてスクラップになるはずだったテイントイが奇的にキタハラくんの元へ集まってしまった。

偶然だと思ukai?

キタハラはなんて答えていいかわからない。

これは偶然なんかじゃない、必然という表現でもない、あえていうならこれこそが子供の頃に憧れた世界を色褪せずに持ち続けた人だけが得ることのできる奇跡さ。

奇跡

キタハラは小吉の言葉を何度も咀嚼する

奇跡、

奇跡、、、

奇跡、、、、キセキ

どう?

キタハラくん 僕が奇跡のミュージアムを作ってあげるよ

キタハラは小吉への「お願いします」という返事をする前に通話が切れたことを気付かず、兄から「おい照久、電話終わっているんじゃないか？」という声で我に返った。

受話器からは ツーツーという信号音だけが聞こえていて、受話器を本体に戻した。

まだ全てが飲み込めた状況ではなかったが、それでもスギヤマさんがおもちゃのムービーを作ってくれ、そのタイトルが「おもちゃの博物館」で、そのムービーをボクにミュージアムとしてプレゼントしてくれることは理解できた。

ここが店じゃなかったら、大声をあげて、両手を天に向かってつき上げていただろう。

やった！ ついにボクのミュージアムができるぞー！